私を育ててくれた人 ～父 笠原博夫～

苦しくもひとすじの道

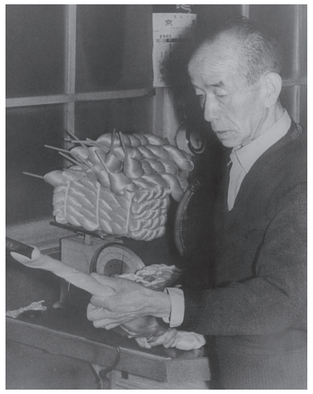
東弥生町　笠原　晴行

「平和なる紺碧の空　湖もなぎてすがしく・・・」の歌い出しで始まる明るくはつらつとした「下諏訪町の歌」は、父笠原博夫の作詞、堀内智司氏の作曲です。一般公募により入選。制定以来今日まで、半世紀近く全町民の愛唱歌として親しまれています。毎朝六時には、そのメロディーが広報無線で全町に流れて一日の始まりを告げており、力強く活気ある詞と旋律が町民の心を和ませてくれます。

父笠原博夫（明治三七年四月八日～昭和四二年二月二八日）は、下諏訪町魁町で生まれ、六二歳で亡くなりました。生粋の下諏訪人です。

耳の聞こえない聴覚障害という逆境の中、家の暮らしが貧しいため、わずか十一歳の時から岡谷の製糸工場で働きました。女子工員さんたちが繭玉から取り出す細い絹糸を束にして、一定の太さに仕上げる仕事です。耳が聞こえないことでばかにされることもありましたが、必死で耐え、黙々と仕事に励みました。

向学心に燃える父は、働きながら小遣いをためては、東京から小学・中学講義録を取り寄せ、十七歳のときに全科を卒業した努力家でもありました。



糸ねじりの仕事に励む

情熱を傾け仕事と作歌にかける一方、あの食糧難時代に、わずかの畑に食糧を求めて、秋葉山で鍬をふるって開墾し生きてきました。まさに塗炭の苦しみの生きざまでした。子どもだった私も、父と共に砥沢山の小屋に泊まっては炭を焼き、四キロほどある山道を、炭俵を背負っては父と下ってきたものです。私が一俵背負うのがやっとなのに、父は五俵の炭俵を背負って山を下るのでした。

父は、妻を愛し子どもを愛した人で、母が乳癌を患った時には、家財道具や本、歌集などを一切売り払ったり質に入れたりして、入院費にあてたそうです。

長病みのやつれし妻の愛しさに
町には行かず夏の夜祭り

音のない世界で、ただ黙々と生きるために頑張った父の人生は、師事した若山牧水同様、仕事と歌と酒が生き甲斐の人生でした。

父が生前よく言っていた「努力」「忍耐力」「精神力」の三つの力は父の生き方そのものだと思います。私も父のような姿を見ながら育ち、父に習って生きてきたつもりです。この三つの力を遺戒として、私の子どもたちにも、人としての道をまっすぐに生きることの大切さとして説いていきたいと思います。

専念に生きんとすればひとすじの
糸にも清き尊さの湧く
（秋葉山公園石碑）

父の業績に対し下諏訪町（当時黒田新一郎町長）からは、その真摯な人生と徳を称え、町民敬仰の的として、葬送当日「模範町民」の称号が贈られました。

父の苦しくもひとすじの人生は、美しく価値のあるものだったと思います。

「満州事変凱旋歌」入選
「下諏訪町の歌」作詞
「糸ねじり職工の歌」（甲陽書房）
全国身障者職業体験記「ひとすじの道」（労働大臣賞受賞）
日本テレビ「ここに生きる」出演
「笠原博夫伝～ひとすじの道～」（雑誌「蚕糸の光」丸山義二執筆）

教育委員会からのおしらせ

★「身近な講師」募集！★

いきいきとした生きがいのある充実した生活を送るため、趣味・芸術・文化・スポーツ等さまざまな分野での学習が進められています。

その学習を行うときの講師を紹介するのが「身近な講師」制度です。あなたのすぐれた知能、知識、豊かな経験を公民館に「身近な講師」として登録しませんか？

社会教育機関、学習グループ、サークルなど町民の皆さんが学習、研修会等を行うときに、この制度を利用していただきます。

登録を希望される方は、町公民館までご連絡をください。

連絡先：下諏訪町公民館　☎28－0002

園児のつぶやき

「先生、昨日の夜　楽しかったね！」
先生**「え？？？」**
「えー、覚えてない？夢の中で一緒に遊んだじゃん。」
先生**「ああーっ・・・そうそう。楽しかったねー！」**
夢の中で先生と楽しく遊んで満足したんですね。
（第1保育園　中村園長）

先生**「へやのゴミ集めたね！きれいになったね！**
K子**「うん！あとゴミをあやとりで取るだけだよ！」**
先生**「・・・？　『ちりとり』って言いたかったんだね！」**（笑）
第５保育園　茅野園長

人権を考える

オレンジリングの輪

十七年度から厚生労働省で行われている「認知症サポーター百万人キャラバン」の一環として、町の投げかけで『認知症サポーター中学生養成講座』が、過日、下諏訪社中学校で開かれた。

サポーターの役割は、特別なことをするのではなく、認知症を正しく理解し、本人や家族を温かく見守ることだと言う。老いは誰にでもやって来る。他人事ではない、つまりは自分の問題なのだ。

「できていることができなくなることで、誰よりも本人が初めに自分の認知症に気づく。本人が一番悲しんだり苦しんだりしている」の言葉に、ハッとさせられた。高齢の両親を持つ自分の身には堪えた。覚束なくなっている親の気持ちを、自分はどのくらい汲み取っていただろうか。自分に余裕がない時に、ストレスをためることになりがちな自分を思い返した。適切な対応ができにくい自分がいた。独立した個人として接することが大切だということ。強い口調はかえって混乱を招き、自尊心を傷つけるという。

この講座を受けた人にはサポーターとして、「オレンジリング」が配られる。「オレンジリングの輪が広がり、温かく見守り適切な手助けがあり、認知症の人が安心して生きることができる下諏訪町にしたい。」とのメッセージが、今でも私の心の中に生きている。

（上野）